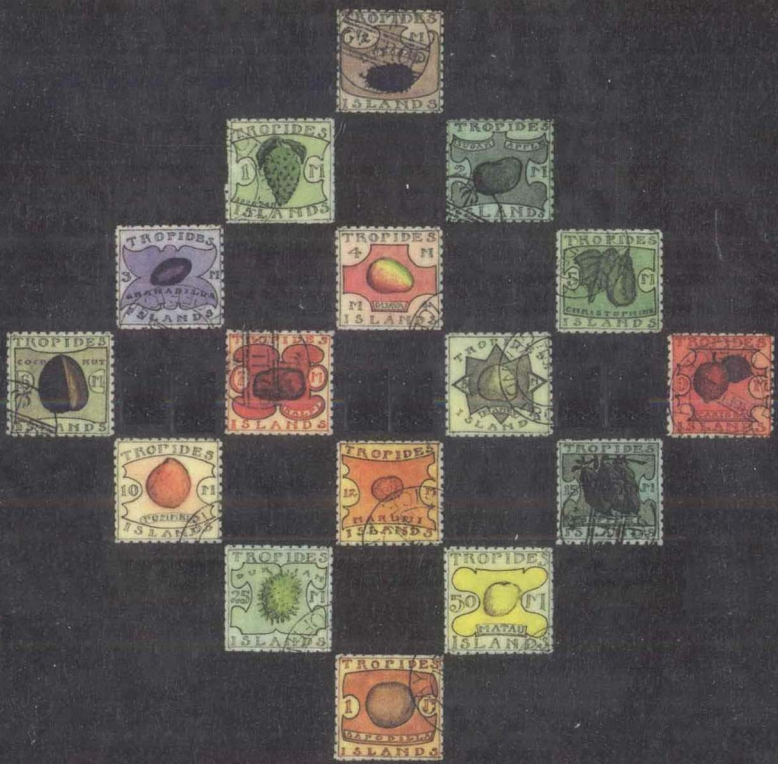
Ⅱ

ふなうた

三浦哲郎



新潮社

短篇集モザイク

Ⅱ

ふなうた

三浦哲郎

新潮社

短篇集モザイクII　ふなうた

著者　三浦哲郎

発行　一九九四年一二月一五日

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電話　営業〇三(3266)五一一一　編集〇三(3266)五四一一

振替　東京四―八〇八

印刷所　二光印刷株式会社　製本所　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Tetsuo Miura 1994, Printed in Japan

ISBN4-10-320918-6 C0093

目

次

ふなうた　7
こえ　19
あわたけ　35
たきび　51
でんせつ　63
やぶいり　79
よなき　91
さくらがい　105
てざわり　113
かえりのげた　127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ブレックファースト　139
はな・三しゅ　147
ひばしら　155
いれば　171
ぜにまくら　181
かお　195
メダカ　211
みのむし　227
あとがき　240

短篇集モザイクⅡ

ふなうた

ふなうた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

市兵衛は、八十歳になるまで、傘寿（さんじゅ）という言葉を知らなかった。

おなじさんじゅでも、傘寿でなくて三寿というのは、弱年のころ祖父からおそわったのをいまでも憶（おぼ）えている。確か、中国最古の詩に出てくる言葉で、百歳を上寿、八十歳を中寿、六十歳を下寿といい、三寿というのは、この三種類の長寿の総称だということであった。

これに比べると、傘寿というのは、なにやら怪しげな言葉に思えるが、世間では、いつのころからか、八十歳の祝いという意味に用いているようである。といっても、傘と長寿の間にはどのような関わりが、などと考えてはいけない。理由は、ただ、傘の略字の仝を上下に分ければ八十と読める、というだけのことであるらしい。

市兵衛は、いまは味噌造りの家業を任せている総領息子から、初めて傘寿という言葉を聞かされた。今年はちょうど八十歳だから、ひさしぶりに一族が顔をそろえて傘寿の祝いをしたいと思うが、どうだろうかというのである。

年々、賑やか嫌いになっている市兵衛は、あまり気が進まなかった。傘寿という言葉も気に入らなかった。

「傘寿か。なんだかインチキ臭いのう。爺に蛇の目は似合わんぞ。」

「そんなことをいったら、喜寿も米寿もインチキじゃないですか。喜寿のときは、あいにくお父さんの入院騒ぎでお祝いが流れてますからね。その分も一緒に祝うことにしてるんです。それに、ちかごろ、甥や姪たちのうちにお祖父ちゃんの顔を忘れたというのが増えてるらしい。やっぱり今度の傘寿を見送る手はないですよ、お父さん。」

総領息子はそういった。

三年前に入院騒ぎを起こしたのは、軽い脳梗塞で倒れたからである。それ以来、市兵衛は、それまで彼の性格のうち最も顕著な特色だった頑固さをすっかり失って、何事にも、老いては子に従えの流儀で臨むようになっている。

このたびも、結局、総領息子が持ち込んできた傘寿の祝いの件を承諾したが、一族というのは大袈裟だから、出席者は五人の息子や娘とその配偶者たち、それに合わせて十二人の孫たちだけにして貰った。それでも、祝って貰う当人を含めて総数二十三人になる。さいわい、物好きな先代が、木造ながら暖炉もシャンデリアもある和洋折衷のだだっぴろい応接間を遺してくれたから、そこを会場に当てて、アップライト・ピアノのほかに不足な椅子やテーブルを運び入れた。但し、余興は、どんちゃん騒ぎとカラオケは遠慮して貰っ

て、せいぜい大人たちは隠し芸、子供たちはお稽古事の成果の披露に留めることにした。

市兵衛の誕生日は、六月十一日である。その年の暦の上では梅雨入りの日であったが、この地方では、降らずに終日蒸す年が多い。浴衣で汗ばむ年もある。市兵衛は、いつものつもりで、単(ひとえ)で祝宴へ出るつもりでいたが、その年は、昼を過ぎてからしとしと雨になった。煙草のけむりを追い出すために、洋風の窓を左右に押し開けると、ひんやりとした大気に乗って細かな雨粒が会場へ舞い込んできた。シャンペンを抜く音も、心なしか湿り気を帯びてきこえた。市兵衛は、袷(あわせ)に着替えて会場にあらわれ、参会者一同から祝いの言葉を受けた。それから、乾杯を済ませて安楽椅子に腰を下ろすと、忽ち下半身を膝掛け毛布で包まれた。老人にとって風邪は最も厄介な難敵なのである。

ひとしきり、飲食のざわめきがつづいたあと、ぼつぼつ孫たちの余興がはじまった。司会は、土地の放送局でアナウンサーの見習いをしているという孫娘が務めた。珍しかったのは、小学一年坊主の太極拳の演技で、あとは独唱、二重唱、それに楽器の演奏が多かった。

市兵衛は、孫のひとりのバイオリンで浮き気味になった歯の根を落ち着かせようと、病後はめったに口にしないシャンペンを三口も飲んで、うとうとしたが、ロシアの、という司会者の声で、目を醒ました。

ピアノのそばに、まだ小学生だが、髪を三つ編みにして背のひょろりとした孫娘がすまし顔で立っていて、司会者はこれからその子が演奏する曲の解説をしているらしい。

「……チャイコフスキーもまた、ロシアの有名な作曲家のひとりで、バレエ組曲〈白鳥の湖〉はどなたでも御存じだと思います。チャイコフスキーには、このような大作ばかりではなく、可愛らしいピアノ曲もあります。たとえば〈四季〉のような。この〈四季〉というピアノ曲集は、まだ不遇だったころのチャイコフスキーが、ある音楽雑誌に毎月一曲ずつ一年間連作したもので、一曲一曲に、それが発表される月にふさわしい標題がつけられています。五月には〈白夜〉、十一月には〈トロイカ〉というふうに。今日は、この〈四季〉十二曲のうちから、お祖父ちゃまの誕生日である六月の曲を、小学五年生の森崎加奈ちゃんに弾いて貰うことにします。ちなみに、六月の曲の標題は〈ふなうた〉です。」

可憐な演奏者は、両手で短いスカートの裾をつまみ、ちょっと膝を折り曲げると同時に首を一方へ傾けた。拍手が湧いた。みんなは安楽椅子の市兵衛を注目した。彼の拍手が、最も高くて、しかも長くつづいたからである。

「誰か歌わないか。ピアノの伴奏で歌えよ。」

市兵衛は息子たちへそういった。息子たちは、訝しそうに顔を見合わせている。これは歌曲ではないのである。

市兵衛は、安楽椅子の上でそっと身じろぎをしながら、最も楽な姿勢に坐り直した。見

綰ってはいけない、と彼は思った。わしがロシアの〈ふなうた〉を知らないとでも思ったら、大間違いだ。わしは、知っているどころではない。あれは、わしにとって忘れようにも忘れられない唄なのだ。わしの骨の髄まで沁み込んでいる唄だ。まるで夢のようではないか、こうして八十歳まで生き延びて、傘寿とやらの祝いの席であの唄を聴くことになろうとは——。

ピアノはなかなか鳴り出さなかった。市兵衛は、弾き手が大人たちのざわめきに不安をおぼえたらしく、まだ両手を前に組んで立ったまま、おずおずとこちらを窺っているのに気がついた。

「さあ、安心してお弾き。」と、市兵衛は弾き手に優しく声をかけた。「こっちを気にすることはないんだよ。こっちはこっちで勝手にするんだから。」

弾き手は、ちょっとの間きょとんとしていたが、祖父の脳に古傷があるのを思い出したのか、わずかに首をすくめると、ようやく椅子に腰を下ろしてピアノに向かった。

「おい、あんまり大きな声で歌うなよ。小鳥はすぐに怯えるからな。」

市兵衛は、息子たちを振り向いてそう囁くと、胸の上に腕を組んで目をつむった。

演奏がはじまった。

市兵衛は、すぐに目を開けた。ピアノの調べが、すでに彼の頭のなかで鳴り響いていた旋律とはあまりにもちがいすぎたからである。けれども、弾き手が曲を間違えたのではな

かった。孫は落ち着いて弾いていた。すると、これは前奏というものであろうか、と彼は思った。が、前奏にしてはいささか長すぎるような気がしないでもなかった。彼は、息子たちの様子を盗み見た。誰もが天井へ目を挙げたり、首をうなだれたりして、静かに聴き入っていた。勿論、ピアノに合わせて歌い出す者は一人もいなかった。曲がちがうのだから、歌おうにも歌えないのだ、と市兵衛は思った。

演奏は五分あまりで終わった。

「上手、上手。アンコールだな。」と、拍手が鳴り止んでから市兵衛はいった。「ねえ、お祖父ちゃんのために、もういちどだけ弾いてくれないかな、ロシアの〈ふなうた〉を。」

弾き手と司会者が、顔を見合わせてうなずき合った。再び拍手が起こった。

――市兵衛は落胆した。縺(もつ)れがちな舌を操って、ロシアの〈ふなうた〉を、と念を押したにも拘わらず、アンコールの演奏も前のと全く同じだったからである。これもまた〈ふなうた〉なら、ロシアにはすくなくとも二種類の〈ふなうた〉があるのだと思うほかはない。

市兵衛は、目をつむってじっとしていた。彼の頭のなかには、あの夜の〈ふなうた〉がよみがえりつつあって、もはや孫のピアノは耳に入らなくなっていた。

あの夜、というのは、忘れもしない、昭和二十年八月十五日の夜のことである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.